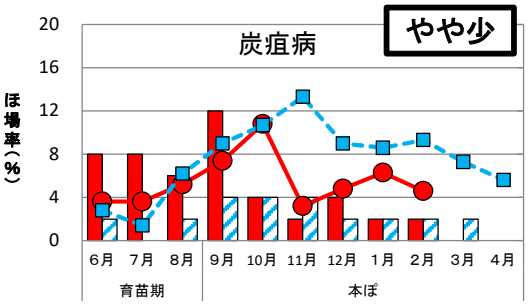
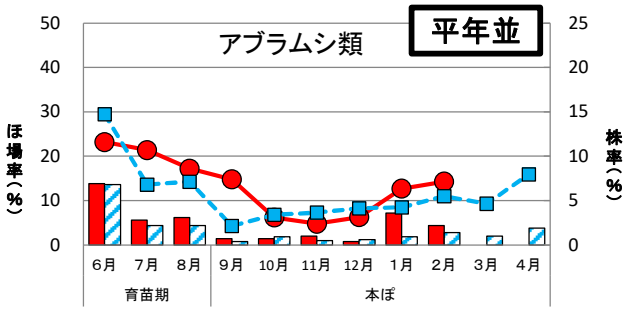
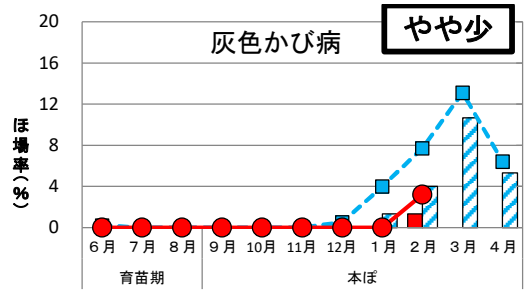
いちご病害虫情報第９号（２月）

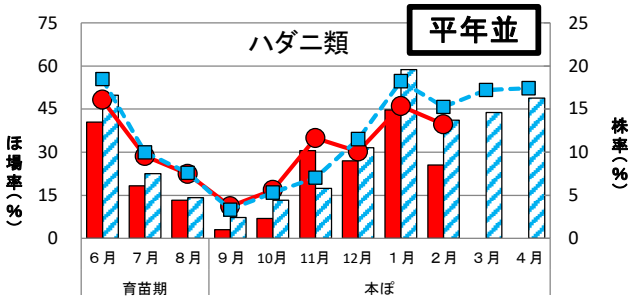
令和７(2025)年２月21日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

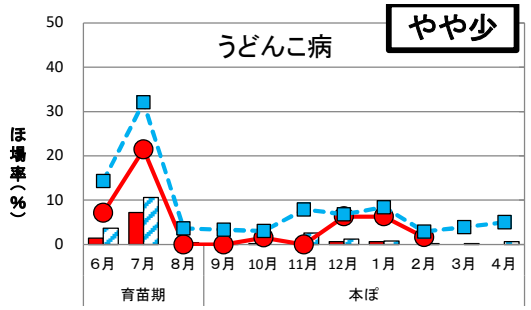
■　病害虫の発生状況　【総調査ほ場数　63 か所 】

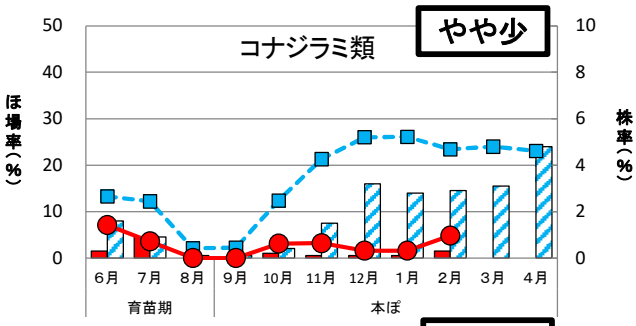


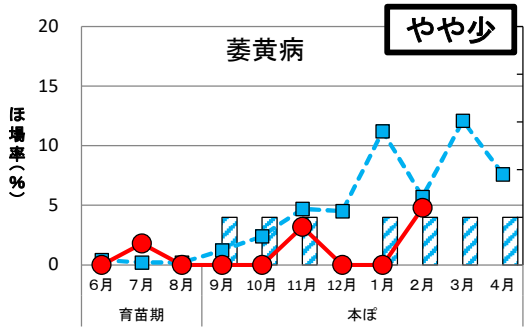


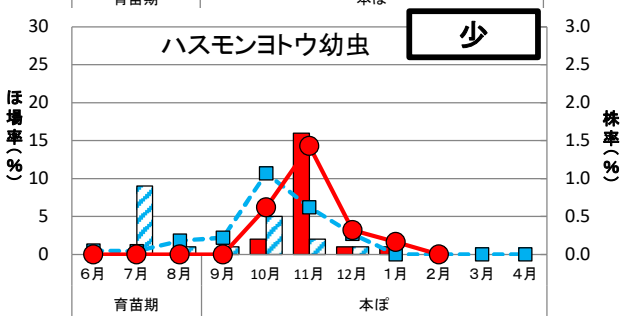


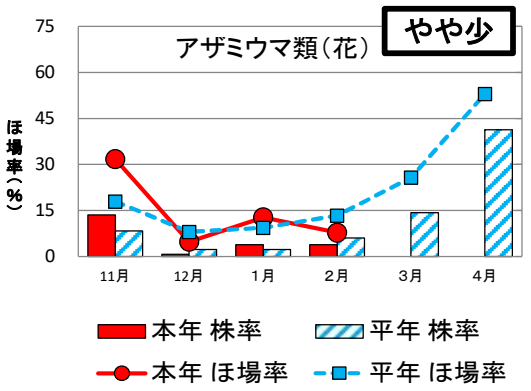












※ほ場あたり25株調査
※株率(%):発生株数／調査ほ場数×25株
※ほ場率(%):発生が確認されたほ場数／調査ほ場数

■　今月の防除ポイント

－　アブラムシ類の対策　－

気温の上昇に伴いアブラムシ類の発生・被害が目立ち始めるので注意しましょう。

1　春先になり、茎葉が繁茂すると、アブラムシ類の発生に気づきにくくなります。葉やマルチ上に落下する脱皮柄や甘露の痕跡を目安に、早期発見に努めましょう。

2　茎葉が繁茂すると、株元に寄生するアブラムシ類には薬液がかかりにくくなります。薬剤散布時には、丁寧な散布に努めましょう。

■　今月のトピックス　萎黄病

被害症状について

萎黄病に感染すると、葉の奇形（写真１）、株の萎縮や黄化（写真２）、クラウン内部の導管の褐変（写真３）、根部の褐変腐敗（写真４）等の症状が現れる。また、高温期には、急激な萎凋から株枯れを起こすことがある（写真５）。

感染経路は、土中に残った胞子が根から侵入して感染することで発病する。また、感染親株からランナーを通じて子苗にも感染する。

土壌温度が25℃～30℃になると多発しやすくなるため、高温期の発生が目立ち、乾燥などで根が傷みやすい環境下で発生が助長される。病原菌は自然土壌中で４～５年以上生存できるため、土壌が汚染されている場合、土壌消毒等を行わないと次作も発生する。

写真１　小葉の奇形

写真２　株の萎縮、黄化

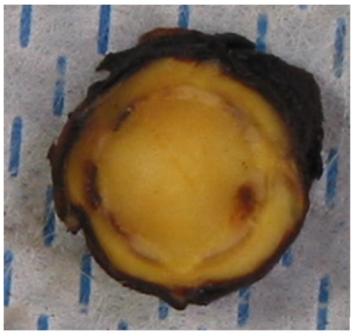


写真３　被害株のクラウン断面

写真４　根の褐変腐敗

写真５　急性萎凋症状

防除対策について

病原菌を親株床や本ぽに持ち込まないため、予防を主体に防除対策を実施する。

１　培土や資材は、病原菌に汚染されていない消毒済みのものを使用する。

２　親株管理・育苗時に発病が疑われる株は早急に除去し、ほ場外に持ち出す。

３　発病株は抜き取り肥料袋等に詰め、空気を排出し口をしっかり閉じて、日当たりのよい野外に放置し、嫌気的発酵処理後に処分する。

４　本病が発生したほ場では、栽培終了後に土壌消毒を行う。

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（℡ 028-665-1244）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはＸ（旧ツイッター）「栃木県農政部（@tochigi_nousei）」、農業総合研究センターホームページ（https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html）でもご覧になれます。